



永田 円了
真国寺住職



酒で人が変わるといふ。でもそれはどうであろうか。変わるのではなく、酒でその人の内面が出た、ということだと思ふ。また、自分がお金を払ってサービスを受ける客の立場になったとたん、態度が横柄になる人がある。ちょっとしたミスも許さないとばかり、店員に土下座を強要する人もいる。人の内側にはいったいどんな魔物がすんでいるのだろうか。

父は小柄で寡黙な人だった。いや無口というより、何かを体全体でこらえていると言ったほうがよいのか、とにかく静かだ

抑圧されたエゴ

った。しかし日が落ち、酒が入ると、とたんに冗舌になった。決していい酒ではなかった。閉じ込められていたエゴが暴れているようだった。

「方丈さん、また酔っぱらって寝とられんがやちゃ」。近くの寺院からの電話である。振りが静から動に振れたように、我をいびつなまでにあらわにし、周囲におおいに迷惑をかけた末に寝込んだのだろう。こん

なことが何度あったらうか。ああ、この世に酒さえなければ、と恨めしく夜空を見上げた。

日本社会での人間関係はちょっとやっかいだ。相手と自分との関係は上か下かのどっちかになるからである。下にいるときはとにかく謝って、いや謝りのポーズをとることで上からの圧力をかわそうとする。しかし閉じ込められたエゴは内側で反発を強め、出口を求め、そこに酒が入ったり、客という立場になったりしたとき、抑圧されたエゴは一挙に暴れ出す。

相手より優位に立ちたい、自慢したい、威張りたい、がエゴの本性である。この怪物どうま

く付き合っていく手立てはないのか。いやある。まずはこの「私になりすましたエゴ」に気づくこと。気づいた時点で、本来の自分とエゴは切り離される。気づくとエゴは共存できないからである。

次には相手との平等な人間関係を、意識的につくることである。立場は違えど、同じ人間同士なんだ、という意識。形のうえでは、私は誰かより劣り、誰かより優れている。でも私の本質は誰にも劣っていないし、優れてもいないと考えるのである。相手を立てようと、不自然にへりくだるのはやめにしよう。

大きく両手を広げて「お客さまは神さまです」といったのは、たしか歌手・三波春夫だった。いま思えば、「お客さまも私も人間同士」と言っただけだった。

お客さまは神さまか